

データサイエンス系科目群：シミュレーション実習 第7回 講義資料

担当：川崎猛史

名古屋大学大学院理学研究科理学専攻物理科学系・非平衡物理研究室 (R 研)

Last update: May 29, 2023

- 1 講義のスケジュール
 - シラバス

- 2 第 6 回自主課題

- 3 分子動力学シミュレーション
 - 運動方程式とその無次元化
 - 位置ベルレ法
 - 速度ベルレ法
 - 第 7 回自主課題

- 4 参考文献

目次

1 講義のスケジュール

■ シラバス

2 第 6 回自主課題

3 分子動力学シミュレーション

- 運動方程式とその無次元化
- 位置ベルレ法
- 速度ベルレ法
- 第 7 回自主課題

4 参考文献

1. 講義のスケジュール

- 当実習は春 1 期にて実施する.
- 講義資料は各講義**予定日当日朝 11 時迄**にアップロードする.
- スケジュール
 - 1 4/17: 第 1 回
 - 2 4/24: 第 2 回
 - 3 5/01: 第 3 回
 - 4 5/08: 第 4 回 (週半ばに中間レポート課題公開)
 - 5 5/15: 第 5 回
 - 6 5/22: 第 6 回
 - 7 5/29: 第 7 回 (5/29: 中間レポート課題提出期限予定)
 - 8 6/05: 第 8 回 (期末レポート課題公開)
 - 9 6/12: 第 9 回 (補講)

1.1. シラバス

当実習では以下の内容を扱う予定である（進捗に合わせ変更する可能性がある）。

- 1 導入
 - C(C++) の使い方 (主に数値計算)
 - Python の使い方 (データ解析と作図)
 - 数値計算の理念
 - 桁落ち
 - 科学計算における無次元化
- 2 常微分方程式の数値解法：減衰振動や調和振動子を例に
 - 微分方程式の数値積分
 - オイラー法
- 3 1 粒子系のブラウン運動
 - ランジュバン方程式（確率微分方程式）
 - 正規乱数の生成法
 - オイラー・丸山法
 - 時間平均とアンサンブル平均
 - 拡散係数の計算
- 4 多粒子系のブラウン運動
 - 相互作用力の計算方法
 - 非平衡系のシミュレーション：相分離現象を例に
- 5 多粒子系の分子動力学シミュレーション
 - 位置ベルレ法と速度ベルレ法
 - 多粒子系における保存則（運動量・エネルギー・角運動量）
- 6 モンテカルロ法
 - 統計力学の復習
 - マルコフ連鎖モンテカルロ法
 - メトロポリス判定法

目次

1 講義のスケジュール

- シラバス

2 第 6 回自主課題

3 分子動力学シミュレーション

- 運動方程式とその無次元化
- 位置ベルレ法
- 速度ベルレ法
- 第 7 回自主課題

4 参考文献

2. 第 6 回自主課題

第 6 回自主課題 Langevin 熱浴中の多粒子シミュレーションの実装 (相分離現象)

直径 a の 1024 個の円板を周期境界をもつ 1 辺の長さが $L = 40a$ の正方形の平面に分散させる．この時、円盤 j の運動は、Langevin 方程式 $m \frac{d\mathbf{v}_j(t)}{dt} = -\zeta \mathbf{v}_j(t) + \mathbf{F}_j^I(t) + \mathbf{F}_j^B(t)$ により駆動されとする．ここで $\mathbf{F}_j^B(t)$ は、熱揺動力であり、以下の揺動散逸定理 $\langle \mathbf{F}_j^B(t) \mathbf{F}_k^B(t') \rangle = 2k_B T \zeta \delta(t - t') \delta_{jk} \mathbf{1}$ を満たすものとする． $\mathbf{F}_j^I(t)$ は相互作用力であり、以下の Lennard-Jones ポテンシャル

$$U(r_{jk}) = 4\epsilon \left[\left(\frac{a_{jk}}{r_{jk}} \right)^{12} - \left(\frac{a_{jk}}{r_{jk}} \right)^6 \right] + C_{jk} \quad (r_{jk} < a_{\text{cut}}) \quad (1)$$

により与えられ、カットオフ長は $a_{\text{cut}} = 2.5a$ とする．いま、時間の単位を $t_0 = \sqrt{ma^2/\epsilon}$ 、長さの単位を a 、摩擦係数を $\zeta = \sqrt{m\epsilon/a^2}$ とする．この時、無次元温度 $k_B T/\epsilon$ を様々に変化させた際の、相分離の有無を数値的に観察せよ．

解説

自主課題 6 のサンプルプログラム “langevin_many.cpp” をリスト 1 に示したので適宜参照せよ．ここでは、無次元温度 $T^* = 5.0$ で結晶配置を乱雑に混ぜ、目的の T^* (パラメータ *temp* で指定) に落とす．そして目的温度を $T^* = 0.2, 0.4, 0.6, 1.0$ と変化させた際の様子を図示した (図 1)．

2. 第 6 回自主課題 (2)

リスト 1: 自主課題 6 のサンプルプログラム “langevin_many.cpp”. 以下の GitHub リポジトリより取得可能[\[リンク\]](#).

```
1  #include <stdio.h>
2  #include <stdlib.h>
3  #include <math.h>
4  #include <iostream>
5  #include <fstream>
6  #include <cfloat>
7  #include "BM.h"
8
9  #define Np 1024
10 #define L 40.0
11 #define tmax 100
12 #define dt 0.01
13 #define temp 0.2
14 #define dim 2
15 #define cut 2.5
16 #define polydispersity 0.0
17
18 void ini_coord_square(double (*x)[dim]){
19     int num_x = (int)sqrt(Np)+1;
20     int num_y = (int)sqrt(Np)+1;
21     int i,j,k=0;
```


2. 第 6 回自主課題 (3)

```
22 double shift;
23 for(j=0;j<num_y;j++){
24     for(i=0;i<num_x;i++){
25         x[i+num_x*j][0] = i*L/(double)num_x;
26         x[i+num_x*j][1] = j*L/(double)num_y;
27         k++;
28         if(k==Np)
29             break;
30     }
31     if(k==Np)
32         break;
33 }
34 }
35
36 void set_diameter(double *a){
37     for(int i=0;i<Np;i++)
38         a[i]=1.0+polydispersity*gaussian_rand();
39 }
40
41 void p_boundary(double (*x)[dim]){
42     for(int i=0;i<Np;i++)
43         for(int j=0;j<dim;j++)
44             x[i][j]-=L*floor(x[i][j]/L);
45 }
```

2. 第 6 回自主課題 (4)

```
46
47 void ini_array(double (*x)[dim]){
48     for(int i=0;i<Np;i++)
49         for(int j=0;j<dim;j++)
50             x[i][j]=0.0;
51 }
52
53 void calc_force(double (*x)[dim],double (*f)[dim],double *a){
54     double dx,dy,dr2,dUr,w2,w6,w12,aij;
55
56     ini_array(f);
57
58     for(int i=0;i<Np;i++)
59         for(int j=0;j<Np;j++){
60             if(i<j){
61                 dx=x[i][0]-x[j][0];
62                 dy=x[i][1]-x[j][1];
63                 dx-=L*floor((dx+0.5*L)/L);
64                 dy-=L*floor((dy+0.5*L)/L);
65                 dr2=dx*dx+dy*dy;
66                 if(dr2<cut*cut){
67                     aij=0.5*(a[i]+a[j]);
68                     w2=aij/dr2;
69                     w6=w2*w2*w2;
```

2. 第 6 回自主課題 (5)

```
70         w12=w6*w6;  
71         dUr=-48.*w12/dr2+24.*w6/dr2;  
72         f[i][0]-=dUr*dx;  
73         f[j][0]+=dUr*dx;  
74         f[i][1]-=dUr*dy;  
75         f[j][1]+=dUr*dy;  
76     }  
77 }  
78 }  
79 }  
80  
81 void eom(double (*v)[dim],double (*x)[dim],double (*f)[dim],double temp0){  
82     double zeta=1.0;  
83     double fluc=sqrt(2.*zeta*temp0*dt);  
84     for(int i=0;i<Np;i++)  
85         for(int j=0;j<dim;j++){  
86             v[i][j]+=-zeta*v[i][j]*dt+f[i][j]*dt+fluc*gaussian_rand();  
87             x[i][j]+=v[i][j]*dt;  
88         }  
89 }  
90  
91 void output(double (*x)[dim],double *a){  
92     char filename[128];  
93     std::ofstream file;
```

2. 第 6 回自主課題 (6)

```
94 static int j=0;
95 sprintf(filename, "coord_T%.3f_%d.dat", temp, j);
96 file.open(filename);
97 for(int i=0; i<Np; i++)
98     file << x[i][0] << "\t" << x[i][1] << "\t" << a[i] << std::endl;
99     file.close();
100 j++;
101 }
102
103 int main(){
104     double x[Np][dim], v[Np][dim], f[Np][dim], a[Np];
105     double tout=0.0;
106     int j=0;
107     set_diameter(a);
108     ini_coord_square(x);
109     ini_array(v);
110
111     while(j*dt < 10.0){
112         j++;
113         calc_force(x, f, a);
114         eom(v, x, f, 5.0);
115     }
116     j=0;
117     while(j*dt < tmax){
```

2. 第 6 回自主課題 (7)

```
118     j++;
119     calc_force(x,f,a);
120     eom(v,x,f,temp);
121     p_boundary(x);
122     if(j*dt >= tout){
123         output(x,a);
124         tout+=10.;
125     }
126 }
127 return 0;
128 }
```

2. 第6回自主課題 (8)

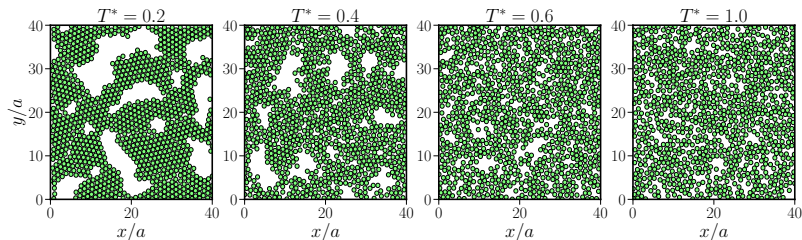


図 1: 周期境界の一边の長さが $L = 40a$, 粒子直径がすべて a の際, 無次元温度 T^* を変化させた際の粒子分布. 特に低温では相分離が起こっている様子が見て取れる. また, $T^* = 1$ あたりから相分離が起り始めることが分かる. [補足] $T^* = 1$ とは $\epsilon = k_B T$ であり, ポテンシャルの谷の深さが熱エネルギーと拮抗している状態.

目次

1 講義のスケジュール

■ シラバス

2 第 6 回自主課題

3 分子動力学シミュレーション

- 運動方程式とその無次元化
- 位置ベルレ法
- 速度ベルレ法
- 第 7 回自主課題

4 参考文献

3 分子動力学シミュレーション

分子動力学シミュレーション（古典 MD）

- 本章では原子・分子が Newton の運動方程式によって駆動される系のシミュレーション：**分子動力学 (Molecular dynamics: MD) シミュレーション**を扱う。
- この様な系は、運動量やエネルギー、角運動量などが保存する、いわゆるハミルトン系と呼ぶ。
- そのため、揺動力や散逸が陽には入らず、温度は一定とならない（定常状態は概ね一定となる）。
- この様な系の統計集団を、*NVE* アンサンブル、またはミクロカノニカル集団（小正準集団）と呼ぶ

3.1 運動方程式とその無次元化

運動方程式とその無次元化

- 粒子間ポテンシャル U で他の粒子と相互作用する、質量 m の古典粒子 j の運動方程式は、

$$m\ddot{\mathbf{r}}_j = -\frac{\partial U(\{\mathbf{r}\})}{\partial \mathbf{r}_j} \quad (2)$$

と表される。

- 運動方程式自体は、Langevin 方程式に比べると、極めてシンプルになり、計算機に乗せる際の無次元化自体は比較的簡単になる。
- 実際、長さの単位を a , エネルギーの単位を ϵ , そして時間の単位を t_0 とそれぞれおけば、運動方程式は、 \sim をつけた無次元化された変数を用いることで

$$m \frac{a}{t_0^2} \ddot{\tilde{\mathbf{r}}}_j = -\frac{\epsilon}{a} \frac{\partial \tilde{U}(\{\tilde{\mathbf{r}}\})}{\partial \tilde{\mathbf{r}}_j} \quad (3)$$

となる。

3.1 運動方程式とその無次元化 (2)

- そして両辺を $m \frac{a}{t_0^2}$ で割ると

$$\ddot{\mathbf{r}}_j = -\frac{\epsilon t_0^2}{ma^2} \frac{\partial \tilde{U}(\{\mathbf{r}\})}{\partial \mathbf{r}_j} \quad (4)$$

を得る.

- ここで時間の単位を

$$t_0 = \sqrt{\frac{ma^2}{\epsilon}} \quad (5)$$

と選ぶと, 運動方程式は,

$$\ddot{\mathbf{r}}_j = -\frac{\partial \tilde{U}(\{\mathbf{r}\})}{\partial \mathbf{r}_j} \quad (6)$$

となり, パラメータフリーの方程式となる.

- 先ほども述べたが, 本系では様々な物理量が保存する. そのため, 離散化の仕方を工夫しないと, 誤差の蓄積により, 保存則が破れるなど, 誤った計算結果を吐き出すことになる.
- 以下, 誤差の蓄積を防止する, シンプレクティックかつ精度の高い離散化 (数値積分) の方法を紹介する.

3.2 位置ベルレ法

位置ベルレ法

本節では、精度の高い離散化手法であるベルレ法を紹介する．特に，以下に示す方法を**位置ベルレ法**と呼ぶ (原著論文 [1], 参考文献 [2, 3, 4]).

- ベルレ法は，中心差分法により運動方程式を離散化したものである．
- 中心差分法では，時刻 t に対する **前方差分** および **後方差分** をそれぞれ実行すると

$$\mathbf{r}_j(t + \Delta t) = \mathbf{r}_j(t) + \dot{\mathbf{r}}_j(t)\Delta t + \frac{1}{2!}\ddot{\mathbf{r}}_j(t)(\Delta t)^2 + \frac{1}{3!}\dddot{\mathbf{r}}_j(t)(\Delta t)^3 + O((\Delta t)^4) \quad (7)$$

$$\mathbf{r}_j(t - \Delta t) = \mathbf{r}_j(t) - \dot{\mathbf{r}}_j(t)\Delta t + \frac{1}{2!}\ddot{\mathbf{r}}_j(t)(\Delta t)^2 - \frac{1}{3!}\dddot{\mathbf{r}}_j(t)(\Delta t)^3 + O((\Delta t)^4). \quad (8)$$

となる．

3.2 位置ベルレ法 (2)

- 式 (7)+式 (8) から,

$$\begin{aligned}
 \mathbf{r}_j(t + \Delta t) &= 2\mathbf{r}_j(t) - \mathbf{r}_j(t - \Delta t) + \ddot{\mathbf{r}}_j(t)(\Delta t)^2 + O((\Delta t)^4), \\
 &= 2\mathbf{r}_j(t) - \mathbf{r}_j(t - \Delta t) + \underbrace{\frac{\mathbf{F}_j(t)}{m}(\Delta t)^2}_{(*)\text{very small}} + O((\Delta t)^4)
 \end{aligned} \tag{9}$$

を得る.

- 同時に, 式 (7)-式 (8) から, 速度に関する関係式

$$\dot{\mathbf{r}}_j(t) = \frac{\mathbf{r}_j(t + \Delta t) - \mathbf{r}_j(t - \Delta t)}{2\Delta t} + O((\Delta t)^2) \tag{10}$$

を得る.

- これを解くことにより, 位置に関しては $O((\Delta t)^3)$ の精度, そして速度に関しては $O(\Delta t)$ の精度が得られる. ここで, 速度の精度は高くないが, 誤差を蓄積する構造になっていないため問題がない. 時間発展を担う位置の方程式の精度が高いため, 誤差の蓄積が抑えられる. この様な数値積分手法を位置ベルレ法という.
- 一方, 位置ベルレ法には数値計算上の問題を有する.
- 式 (9) における (*) で示した項が他の項に比べて極端に小さくなる.

3.2 位置ベルレ法 (3)

- これによる桁落ち・情報落ちのリスクが生じるため、この位置ベルレ法を一般的には分子動力学計算では用いられない。
- 数理的な構造は同等であるが、この情報落ちのリスクを回避した手法として**速度ベルレ法**がある。以下速度ベルレ法について説明する。

3.3 速度ベルレ法

速度ベルレ法 [2, 3, 4]

- ここでは数値的な情報落ちを回避したベルレ法（速度ベルレ法）について説明する.

3.3 速度ベルレ法 (2)

- まず式 (9) は以下の様に変形可能である.

$$\begin{aligned}
 \mathbf{r}_j(t + \Delta t) &= 2\mathbf{r}_j(t) - \mathbf{r}_j(t - \Delta t) + \frac{\mathbf{F}_j(t)}{m}(\Delta t)^2 + O((\Delta t)^4) \\
 &= \mathbf{r}_j(t) + \frac{\mathbf{r}_j(t)}{2} + \frac{\mathbf{r}_j(t)}{2} \\
 &\quad - \mathbf{r}_j(t - \Delta t) + \frac{\mathbf{F}_j(t)}{m}(\Delta t)^2 + O((\Delta t)^4) \\
 &= \mathbf{r}_j(t) + \frac{1}{2} \left[2\mathbf{r}_j(t - \Delta t) - \mathbf{r}_j(t - 2\Delta t) + \frac{\mathbf{F}_j(t - \Delta t)}{m}(\Delta t)^2 \right] \\
 &\quad + \frac{1}{2} \mathbf{r}_j(t) - \mathbf{r}_j(t - \Delta t) + \frac{\mathbf{F}_j(t)}{m}(\Delta t)^2 + O((\Delta t)^4) \\
 &= \mathbf{r}_j(t) + \mathbf{v}_j(t - \Delta t)\Delta t + \frac{(\Delta t)^2}{2m} [\mathbf{F}_j(t) + \mathbf{F}_j(t - \Delta t)] + \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t) + O((\Delta t)^3) \\
 &= \mathbf{r}_j(t) + \mathbf{v}_j(t)\Delta t + \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t) + O((\Delta t)^3)
 \end{aligned} \tag{11}$$

3.3 速度ベルレ法 (3)

- ここでは,

$$\frac{1}{2} [\mathbf{r}_j(t) - \mathbf{r}_j(t - 2\Delta t)] = \mathbf{v}_j(t - \Delta t)\Delta t + O((\Delta t)^3) \quad (12)$$

を用いた.

- すると, 以下の関係式

$$\mathbf{v}_j(t) = \mathbf{v}_j(t - \Delta t) + \frac{\Delta t}{2m} [\mathbf{F}_j(t) + \mathbf{F}_j(t - \Delta t)] + O((\Delta t)^3) \quad (13)$$

が得られる.

- 時間発展の主計算を速度に関して行うことで情報落ちを回避する.
- また, ここでの速度の精度は $O((\Delta t)^2)$ となり精度が高い.
- これより, 速度ベルレ法における重要な式をまとめたものが以下の様になる.

3.3 速度ベルレ法 (4)

(まとめ) 速度ベルレ法

$$\mathbf{v}_j(t + \Delta t) = \mathbf{v}_j(t) + \frac{\Delta t}{2m} \{\mathbf{F}_j(t + \Delta t) + \mathbf{F}_j(t)\} \quad (14)$$

$$\mathbf{r}_j(t + \Delta t) = \mathbf{r}_j(t) + \mathbf{v}_j(t)\Delta t + \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t) \quad (15)$$

実際のコーディングの際は以下の通り行えば、極めて効率よく計算できる。

速度ベルレ法における計算手順

- (1) $\mathbf{r}_j(t + \Delta t) = \mathbf{r}_j(t) + \mathbf{v}_j(t)\Delta t + \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t)$
- (2) $\mathbf{v}'_j(t + \Delta t) = \mathbf{v}_j(t) + \frac{\Delta t}{2m} \mathbf{F}_j(t)$
- (3) Using $\mathbf{r}_j(t + \Delta t)$, compute $\mathbf{F}_j(t + \Delta t)$.
- (4) $\mathbf{v}_j(t + \Delta t) = \mathbf{v}'_j(t + \Delta t) + \frac{\Delta t}{2m} \mathbf{F}_j(t + \Delta t)$
- (5) Return to (1) with updating time.

3.3 速度ベルレ法 (5)

時間反転対称性

離散化した速度ベルレ法の方程式（式 (15)）から出発して、 $t + \Delta t \rightarrow t$ に同一軌道を通り戻ることができる。まず、速度は項を移行させることで成立する。

$$\mathbf{v}_j(t) = \mathbf{v}_j(t + \Delta t) + \frac{-\Delta t}{2m} \{\mathbf{F}_j(t + \Delta t) + \mathbf{F}_j(t)\} \quad (16)$$

さらに位置に関しては、

$$\begin{aligned} \mathbf{r}_j(t) &= \mathbf{r}_j(t + \Delta t) - \mathbf{v}_j(t) \Delta t - \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t) \\ &= \mathbf{r}_j(t + \Delta t) - \mathbf{v}_j(t + \Delta t) \Delta t + \frac{(\Delta t)^2}{2m} [\mathbf{F}_j(t + \Delta t) + \mathbf{F}_j(t)] - \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t) \\ &= \mathbf{r}_j(t + \Delta t) - \mathbf{v}_j(t + \Delta t) \Delta t + \frac{(\Delta t)^2}{2m} \mathbf{F}_j(t + \Delta t) \end{aligned} \quad (17)$$

となり反転させることができた。

3.4 第7回自主課題

第7回自主課題 分子動力学シミュレーション (古典 MD) の実装

粒子数 $N = 1024$, 直径 a の同一円盤粒子からなる一辺の長さ $L = 40a$ の周期境界に閉じ込められた 2 次元系を考える. 今回用いる粒子間ポテンシャルは, 斥力のみからなる

$$U(r_{jk}) = \epsilon \left(\frac{a_{jk}}{r_{jk}} \right)^{12} + C_{jk} \quad (r_{jk} < a_{\text{cut}})$$

を採用する. ここでカットオフ長は $a_{\text{cut}} = 3.0a$ とする. ここで, 長さの単位を a , エネルギーの単位を ϵ , そして時間の単位を $t_0 = \sqrt{ma^2/\epsilon}$ とするとき以下の問いに答えよ.

- (1) 自主課題 6 で構築した Langevin 熱浴を用いることにより, 無次元温度 $T^* = k_B T / \epsilon = 0.9$ を取る熱平衡状態における各粒子の位置座標 $\{\mathbf{r}_j\}$ と速度 $\{\mathbf{v}_j\}$ を取得せよ.
- (2) (1) で取得した座標と速度を初期条件として, 分子動力学シミュレーションを実行し, この時, 全粒子の運動エネルギーを K , ポテンシャルエネルギーを U とするとき, 力学的エネルギー $U + K$ が時間に対して保存することを示せ.

自主課題 7 のサンプルプログラム (リストを用いた高速化はしていないもの) “md.cpp”は GitHub リポジトリより取得可能である[\[リンク\]](#). 適宜参照し学習せよ.

3.4 第 7 回自主課題 (2)

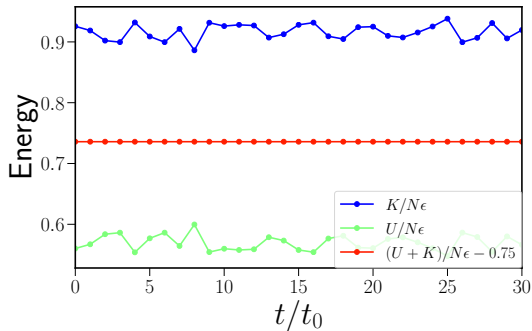


図 2: 自主課題 7(2) の解答例. 力学的エネルギーが保存している様子が見て取れる. なお, ここでは 1 粒子あたりのエネルギーを表示した.

目次

1 講義のスケジュール

■ シラバス

2 第 6 回自主課題

3 分子動力学シミュレーション

- 運動方程式とその無次元化
- 位置ベルレ法
- 速度ベルレ法
- 第 7 回自主課題

4 参考文献

参考文献・ウェブサイト

- [1] Verlet L (1967) Computer "Experiments" on Classical Fluids. I. Thermodynamical Properties of Lennard-Jones Molecules.
Physical Review 159(1):98–103.
- [2] Frenkel D, Smit B (2001) Understanding Molecular Simulation: From Algorithms to Applications.
(Elsevier).
- [3] Allen MP, Tildesley DJ (2017) Computer Simulation of Liquids: Second Edition.
(Oxford University Press).
- [4] Okazaki S, Yoshii N (2011) コンピュータ・シミュレーションの基礎（第2版） - 株式会社 化学同人.
(化学同人).